集住環境生成過程における価値づくりについての考察

コーポラティブ住宅・あじろぎ横丁について

PLANNING HUMAN LIVING VALUES IN THE PROCESS OF CREATING LIVING ENVIRONMENT

A case study of the co-operative housing, 'Ajirogi-yokochoh'

山田 朋来*, 延藤 安弘**

Tomoko YAMADA and Yasuhiro ENDOH

The purpose of this paper is to find out the factors which induce the various human living values in the neighbouring environment. It may be assumed that interrelationship between environment and community creates such values.

We concerned with the maintenance process in the shared space of co-operative housing 'Ajirogi-yokochoh' where the residents' participation has been made both in the planning and in the management. In conclusion, the sense of community is changeable but one of the factors which renew the satisfactory community is the diverse meanings of socializing in the process of improving the environment.

Keywords : co-operative housing, shared space, residents' participation, living environment, community, human living value

コーポラティブ住宅, 共用空間, 居住者参加, 居住環境, コミュニティ形成, 価値づくり

1. 研究の意義と目的

これまでの計画的集住におけるコミュニティ計画は、計画者主体のハード面での充足に偏りすぎ、生活者の側からの能動のかかわりを引出すソフト面からのアプローチに欠けていた。生活者のかかわりも、時間的ゆとりとコミュニティにかかわるきっかけを多く持つ人々に偏ったものになっている事が多い¹⁾。今日、余暇の増大という社会的変化に伴い、地域社会としての受け皿の不足への気づきと生活基盤の拡充に対する関心は高まっている。余暇に対する関心は、娯楽的な楽しみだけではなく、地域をより暮らしやすい場所にするために住み手自身が主体的に関わるといった創造的な活動にまでおよぶものである。しかし、余暇の一部として地域の活動に時間を振りむけることが有意義であることは個々の思いのうちにはあっても、それまで地域とかかわるきっかけを持たなかった人々にとって、その匿名性ゆえに、主体的取り組みをまとまりのある力にまで発展させにくいという状況がある。そのような力は生活にかかわる問題が生じては

じめてまとまりのある力となるが、問題が生じる以前から継続的な努力が必要ではないだろうか。大きな地域社会全体は困難でも、まず身近な人々と顔を合わせ、身近な環境を整え、漸成的に力を集めていく事は可能であろう。環境を整えるという継続的な行為の中で、住み手同士がかかわりあうことはコミュニティ意識を維持していく上でも意義のあるものと考えられる。

ここでは、身近に住み手自身が手を加えられる共用空間があり、その維持管理の作業を通して居住者全員が顔を合わせる機会を持ち、小さなコミュニティとしての基盤を維持しつつ、地域からの信頼を得ているコーポラティブ住宅を考察の対象にしている。コーポラティブ住宅は一般的に「コミュニティ形成が良好である」というとらえ方がされるが、本稿では居住プロセス全体にわたって「良好」を維持することの困難さとその乗り越えの状況を人々の環境生成に対する取り組みや意識から読み取ることを試みている。コミュニティが恒常的に持続するものではなく、空間や人を媒介としながら、それら

* 熊本大学大学院自然科学研究科 大学院生・農修

Graduate Student, Dept. of Nature and Science, Graduate School of Kumamoto Univ., M. Agri.

** 熊本大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kumamoto Univ., Dr. Eng.

の幅広い具体的かかわりを通して意識の高まりや希薄化を経験し模索する過程の中に価値の発見や積み重ねがあるものとする。

ところで、コーポラティブ住宅の共用空間についての既往の文献としては福田らによる環境学習についてのものがあるが²⁾、ここでは環境学習や管理そのものについて論ずるのではなく、全員参加による定期的な管理に伴う多様な「コト」の共有化がコミュニティづくりの核となっていることに着目した。そうした過程における人と人、また人と空間を結ぶインターフェイスとして相互に影響し合う関係概念としての側面に光をあてる。いわゆる従来の「管理」という現状維持的意味合いを発展させ、「集住環境生成過程」としてとらえることに本論の意義がある。

ここで言う「集住環境」には共用庭、道、広場などのコモンスペースという物的空間と住み手同士のかかわりによって形成される人的環境が含まれる。また、「生成」とは、一元的に秩序だてられた「管理」そのものの価値規定よりは、むしろ「管理」の場から派生する多元的な価値こそが人と環境のかかわりのなかで住み心地を高めるさまざまな要因を「生成」という仮定のもとで使われる³⁾。多元的な価値とはたとえば、共用空間という「モノ」の共有化によって豊かな感性が育まれることともに、環境生成のための苦楽の行動の共有化、すなわち「コト」の共有化によって親密な人間関係が形成されていくことであり、それらの関係性からの価値づくりのプロセスをさすものである。また価値づくりの計画とは「生活者それぞれの価値や目標自体を創造的に発生させる」⁴⁾ものとしてとらえられる。

本研究の目的は集住環境計画と環境生成過程における居住者参加に着目し、環境とコミュニティの相互関係から生成する集住価値を発見し、それらを生む関係概念を明らかにすることにある。

2. 調査概要

2.1 調査対象の位置づけ

調査対象としてコーポラティブ住宅「あじろぎ横丁」を選んだ理由としては、まず第1に、計画と管理の両者に居住者がかかわっていること、第2には、空間的要素として、緑、水、土といった一般的には管理の困難な有機的環境を居住者の積極的意向によって取り入れていること、第3には、定期的な管理実態においては男性と子供の参加率が最も高く⁵⁾、また住み手の意識においては子供の管理参加に対し、男性は全員が肯定的な答えであった事⁶⁾、第4には、日本のコーポラティブ住宅全体の中でそれは「コミュニティづくりとして密度の高いプロジェクト」⁷⁾の1つとして評価されていること、などユニークな特徴を備えているためである。共用空間研究

が行われているユーコートとの違いとしては、戸数、居住歴、定期的管理への参加形態、作業実態、就労率、改修歴等が挙げられる⁸⁾。特に、全戸が共働きであり、普段顔を合わせにくい人々がそろって全員参加の管理形態は単に作業をする以上の意味があり、コミュニティ生成状況の変遷を見るのに適している。あじろぎ横丁の空間特性と集住生活についてはすでに既往の文献があるが⁹⁾、本論では、入居以前から今日までの約10年間にわたる集住環境生成の反復と衰退と再生という時間のプロセスと空間と人の関係性を考察の焦点とする。また対象を1つに絞ることによって、より環境生成に対する深い意味をくみとり、特殊性のなかにも一般性と普遍性を見いだそうとするものである。

調査方法としては、計画段階での環境形成への住み手の思い入れについてと9年間の管理実態について聞き取り調査を行い、関連資料の収集を行った。さらにそのうちの1年間については筆者自らが共同作業に直接かかわり、単なる「客観的観察」ではなく、その限界を意識した上で「経験の場の共有」のための方法論としての「参与型調査」を行った。そこにみられる事象とそれらにひそむ諸概念を発見し、抽出する研究態度は「Participant conceptualizer (参加型研究者)」¹⁰⁾としてのそれである。そうすることによって管理対象のモノと人の関係を観察するだけでなく、人と人、人とモノの間のコトの多様な関係性を把握することが可能になると考えた。

2.2 調査対象概要 (図-1)

あじろぎ横丁は宇治市木幡に建つ17戸のコーポラティブ住宅である。3000m²に2戸1、2階建ての住宅が9棟配置されている(うち1棟は集会所を含む)。竣工当時は茶畑や古い民家も軒を連ね、旧街道の趣があったが、近年は次々とマンションの開発が進んでいる。共用空間の構成としては「緑」「水」「土」を取入れている。

70種1000本の樹木を植え、井戸を掘って泉を配し、泉から川を引いて住戸の周辺をめぐるせ、途中には魚の

図-1 あじろぎ横丁配置図 (改修前)

すむ池を加え、通路は地道となっていた。'92年春には改修工事を行い、地道には木製ブロックで舗道を作り、縁石を配して花壇を作った。溝のような深い川は浅いせせらぎへと改修された（図-2）。

居住者構成は、男性が30代1人、40代14人、50代1人、女性は20代3人、30代2人、40代14人、50代1人、70代1人、80代1人、子供37人（うち小学生以

下20人）の計75人である（1992年8月現在）。

3. 計画における価値形成の過程

計画におけるイメージと想入れを示したのが図-3である。計画におけるイマジネーションを豊かにしたものとして、次のことが指摘される。

図-2 あじろぎ横丁配置図（改修後・1992年6月20日現在）

図-3 共用空間計画における環境のイメージ

図—4 9年間の共用空間の管理実態

(1) 夢づくりの過程

計画はおのおのが住むことの夢を語ることから始まった。男性が積極的に計画にかかわった。「おとうさん同士の仲がよい」という基礎は夢を語り合う過程でつくられた。それぞれの夢には3つの軸がからんでいる。第1には、子供がのびのびと感性を豊かにするために必要な環境であり、第2には、大人が子供時代に経験した楽しい思い出、原風景¹¹⁾に対する憧憬の再現であり、第3には、大人自身の気持ちをやわらげる空間へのイメージである。お互いに触発し合う夢の中で特に第1の軸が大切にされた。自然とふれあい、豊かな環境によって人を引出し、近隣の親しみを深めることが主題となった。

(2) 場所の魅力の発見と自律的決定がデザインの可能性をひらく

建設予定地の調査で得られたものをできるだけ生かそうという姿勢がある。果樹への希望は敷地内の既存の果樹を住戸配置の工夫で残すことによって達成された。水も偶然の産物であり、議論の中で子供の頃の水の思い出や、良い水が出そうだという事から、計画に生かされた。子供の生活空間を広げるために、駐車場は作らず、専用庭の境界もなくした。「みんなで話し合っているうちに自然に『やろう』ということになった」という様に技術的に可能であれば住み手の主張を通して。ここには自ら価値を選び取る自由さと期待がある。設計者にとっても、これまでの在来的な管理の視点に縛られて実現しにくかったデザインにかかわることになり、あらたなデザインの可能性が開かれた。このようなデザイン決定における話合いの過程によってコミュニティとしての基盤が作られた。

(3) 不確定要素に対する楽観性

自然の材料が多く、のちの管理には手間がかかるデザインであるが、「みんなでやればなんとかなる」という集団としての自信が表われている。ここには物をつくる過程における、住み手の住まうことの夢実現に向けての強度な気持ちの集中があった。一般的には管理のわずらわしさゆえに有機的環境の豊かさは実現しない。しかし、住み手が夢を語る過程においては豊かさへの希求の強さが知らず知らずにならずに吸収している。そのプロセスは、在来的発想を逆転させるメビウスの帯のような価値の転換の過程でもあった。住宅建設のための会の結成から竣工までに2年2か月を要した。

4. 9年間の環境生成過程

自然に囲まれた環境の夢実現と生活地であるがゆえに人為的に制御しなければならない管理はさまざまな葛藤を生む。また月1回の全員参加という管理形態はコミュニティづくりへの意識をも映しだす。竣工後から今日までの9年を追いつながりその変遷を分析する。その過程

は図-4に示した。

(1) 育成意識への転換

竣工後、居住者は達成感の歓喜に包まれていたが、約1年後の総会でのTO氏の「結構な財産を管理しているんやからありがたいと思わなくては」の言葉に静まりかえった。「管理という言葉に皆がはっとさせられた」というように、管理の永続性への認識の転換があった(図-4以下省略'84過程)。計画過程でのコミュニティづくりに向う集中力は、維持、育成のエネルギーへと転換されて受継がれる。理想や理念は家が完成した時に達成されるのではなく、維持管理においてそれを貫いていく育成過程のほうが困難であることを予測させた。

(2) 共生をとりむすぶ環境生成過程

緑、土、水という管理の困難な材料の維持、育成は、多くの提案、議論、合意を必要とした。毎月の共同作業の場が議論の場となった。コミュニティ全体の意識としての価値の高め合いが、環境における価値を創出したということでもある。環境と人の共生の姿勢は、人同士の共生と相互に支え合いつつ維持されている。

継続的に管理を必要とする緑については、当初は育成方法に未熟で枯死や虫害の危機もあったが('83~'84緑)、根付いてからは順調に育ち、剪定のリーダーが出現することによって('86緑)、住まいとの調和と全体の統一感という新たな価値が加わり、洗練された空間が創出された。最も労力を必要とする地道の管理は体力的に困難さを増したことで、雨天時の通行困難という問題もあり、下水道工事を機に舗道が作られた。材料は検討の末、これまで作り上げてきた環境の質を考慮し、高価であるが木製ブロックを用いること、また資金の節約のために業者まかせにせず、できるところは自力で工事することに合意がなされた('91土)。花壇が作られ、草花という管理の困難な材料も取り入れられた('91緑)。改修の際にも安易に流れず、より空間の質を高める方向で検討が進められたことに、それまでの8年間の価値の積み重ねが伺われる。

(3) 子供の環境共生における理念の継続

「子供にとって豊かな環境」に対し、子供は予想を上回る活発な反応を見せた。車のない共用空間だけでなく、境界のない専用庭¹²⁾は集団遊びの場を広げた。しかし、実際の遊びが始まると芝生の養生は遊び場をせがめ('83~'85緑)、深い川は遊びを妨げること('83~'84水)への不満がつり、芝生は立入り禁止の期間が緩められ('86緑)、より強い芝への検討がなされ('87~'90緑)、川は浅いせせらぎへと改修された('91水)。このように子供がのびのびと遊ぶことに優位性をおき、そのための改善が検討され、実施されている。管理面での問題が生じた場合にも、子供の成長によって環境も落ち着くであろうという長期的視野にたって共生理念が貫かれてい

る。それは物的環境の維持にとどまらず、大人と子供の話し合いや価値の選択という人的環境としても意味がある。改修工事の際にも舗装には足にあたりのやわらかい木製ブロックが用いられ、子供の遊びのために芝を貼らずに一部土の部分を残した（'91 土）。工事の際には、自力の共同作業が多く行われたが、これまで親たちが知恵と力を集めて維持してきた環境を享受する側であった子供たちが成長し、維持管理から改修へと部分的ではあるが空間を再創造する側に加わった。このことによって子供はコミュニティの中で庇護される立場から一員としての自覚を促された。

（４）参加に対する意識の変容

参加については４年目ぐらいまでは「『みんないっしょに』の雰囲気は煩わしくしんどいと思う時もあった。」（'83～'86 参加、過程）が、「みんないっしょに」という緊張感を乗り越え、お互いがわかりあってくると、精神的には楽になった（'87 参加、過程）。この頃から共同作業もしだいにマンネリ化し出席もルーズになりつつあった。管理に手がかかる環境のために、出席率が落ちると参加者の負担が増え、ますます管理が困難になるという問題が生じ、コミュニティとしての停滞感からの危機感が強まった。作業に楽しみを加える試みとして朝食作りも始まった（'88 行事）。これらの停滞感を個々の意識に訴えるために SJ 氏により、「全員参加は原則だが、できない人のために前もって別の日に個別に作業をするか、それでもできない人はお金で払うようにしたらどうだろうか。」という提案がなされた（'90 参加）。これはお金ですませばよいという考え方ではなく「『自分たちの居住環境と緑を自分たちの手でまもる』ということをもみんなの共通項として自主的自発的な『高度な自覚』に支えられたものとして認識されていたはずである」ことが強調された。ここでは逆説的提案によって共同作業の意味が照射され、自発的な互助の精神とコミュニティに対する意識が強制的に縛られたものではなく各自の主体的意識によって支えられることが再認識されている。この訴えかけ以後参加者は再び増えたが、一時期のコミュニティとしての停滞感を打破したのは、改修工事であった。改修工事というエネルギーの結集が一種の刺激剤となり、また空間が更新されたことに対する新たな愛着から環境とコミュニティにおける共生の意識が高まった（'91 過程）。こうした一連の流れの中での、反復と停滞と再創造のプロセスにみられることは、長い時間軸による人々の意識の変遷と、義務と主体性という個々の意識における「社会的エコロジカル」¹³⁾なバランスによって支え合わされながら解決方法がさぐられていることである。そこには身近な環境における、自然生態のエコロジーと人間の存在・意識に関わる社会的エコロジーの接点が垣間見えることは注目される。

5. 通年の管理実態

委託をもっと取り入れたいという希望¹⁴⁾が住み手の中にそれ相応に存在しながらも、共同管理作業を続ける事の意義について分析を行うため、一年間の管理実態をよりくわしく見る事にする（表—1, 図—5）。この調査は 9 年間の過程の中で言えば、'88 年度から'89 年度に当たる。男性の参加率が 62.0 %, 女性の参加率が 49.6 %¹⁵⁾、平均所要時間は 122 分であり、男性の参加率が高い事と所要時間の長い事が特徴である。「全員で黙々と作業をする」過程を越え（表—1, 以下省略観察 26）、精神的には楽になっている時期である。コミュニティ形成の過程で言えばゆるやかなつながりの半面マンネリにもなってきたおり、その打破を模索している過程でもあった。

共同作業に筆者自らが毎回参加することによって把握した、それがもたらす価値づくりの効果を読み取ると次の様なことがいえる。

（１）コミュニケーションの楽しさと効果

環境に五感を開放される心地好さと人々の親密な会話からかもしだされるなごやかな雰囲気がある。生活上の情報交換、仕事の事、子供や学校の事、周辺環境の変化への認識と個々の関心を広げる機会でもある。全戸が共働きで普段顔を合わせにくいため、共同作業においてお互いに顔を合わせる機会の貴重さがきわだったものとなっている。大きな家族の様な安定感が感じられる。職場を離れた気楽な人付き合いの貴重な場でもある。作業の大変さもこのコミュニケーションの効果によって軽減される（観察 1, 2, 6, 16（図—5）以下省略写真 No. 2）。また、仕事に偏りがちな生活のバランスを取戻す機会でもある。家庭では家事をしない男性も共同作業には出るというように、男性の交流によって家庭での仕事に引出す効果がある（観察 2, 22, 写真 No. 2）。そして社会の忙しいリズムから自然の持つゆっくりとしたリズムに身をおき気持ちをやわらげている。17 戸あれば、気の合う人、合わない人もあるであろうが、合わない人ともつきあいつつ理解を深める場としての意義もある。継続意欲を高める工夫として朝食づくりが始まってからは、戸外で食をとにもするという楽しみも加わった。食べ物に分け合うという大切な意味もある。

（２）達成感の共有

泉の周りの土の入れ替えなどの力仕事も、作業後の晴ばれとした表情は印象的であった（観察 22, 写真 No. 4）。大人はことさら子供に説明しないが、豊かな環境を維持して行くためには、大切にしつつもコントロールすることの厳しさを身をもって教えている。力作業は老後の不安を触発し、長期的管理計画をたてるきっかけとなる。このように力を結集する事によって達成される事への経験や精神的な価値が重ねられ、コミュニティ意識が高め

られる。

(3) まとまりのある力への地域からの信頼感

周辺地域は古い町並みで、新参者であった居住者は小さなコミュニティとして閉じたものにならないように当初から周辺に駆け込もうと意識的に努力した。共同作業

は、地域に対しても、まとまりのある力をさりげなく表出して、匿名的集合住宅の無関心さへの不安とは対照的に継続的に信頼感を与える効果がある。地域の信頼を得て、地蔵盆の開催にも場所を提供している（観察7）。そのように地域からの期待を受けることで、コミュニ

表一 共同作業の1年間の状況 (1988.6~1989.5)

月日 天気	大人	子供 作業 遊び	観察
6/19 曇	・草取り…………… ・剪定…………… ・芝草刈り…………… ・泉掃除(写真NO.1)…………… ・川掃除…………… ・排水ホースの設置…………… 男10人 女15人	■□大人の周辺で…………… ■□場所を教えてもらう…………… ■□大人に代わってもらう…………… ▽子供同士話しながら…………… ■□□大人の周辺で…………… ●三輪車に乗る…………… □赤ちゃんの面倒をみる…………… 男子4人 女子7人	1. 子供の親が誰かわからないほど大人と子供が親しい。 2. 大人同士、特に男性同士の会話がが多く、楽しい雰囲気。 3. 「子供はもっと出てきて、仕事をして欲しい」との声。 4. 泉の掃除は当番制でいつやってもよい。 7:10~9:40 150分
7/17 晴	・草取り(写真NO.2)…………… ・剪定…………… ・泉掃除…………… ・川掃除…………… ・受水槽…………… 男8人 女10人	■□□大人の周辺で…………… ■□場所を教えてもらう…………… ■□□大人の周辺で…………… ●中に入って掃除をし、大人に道具をとってこさせる…………… 男子3人 女子5人	5. 作業の中心は受水槽の掃除だった。子供が「おっちゃん、ブラシ持ってきて」と大人に指図をする。対応も一人前な仕事の様子も一人前。 6. 草取りは女性の情報交換の場。 7:10~9:00 110分
8/21 うす曇	・草取り(写真NO.3)…………… ・剪定…………… ・芝草刈り…………… ・掃き掃除…………… 男7人 女10人	▽大人の周辺で…………… ●枯れた木を教えてもらう…………… ●切倒し…………… ●一輪車で枝葉を運ぶ…………… ■オセロ…………… ○ままごと…………… ○□□地蔵盆の設置のあたりをウロウロする…………… 男子9人 女子5人	7. 泉の場所での地蔵盆の設置も整い、子供たちもなんとなくうれい様子。 8. きのうの雨で緑も勢いがある。 9. 「緑が多すぎる」「手入れが大変」 7:10~9:30 140分
9/18 曇	・草取り…………… ・剪定…………… ・泉掃除…………… ・川掃除…………… 男8人 女6人	▽大人の周辺で…………… ■□ほとんど子供だけで…………… ●ホースで水まき…………… 男子6人 女子1人	10. 保育園のお泊り保育で参加者が少ない。 11. 泉の掃除は相変わらず子供に人気があり、タワシで藻をとる作業を小学生の男子がよくやっていた。 7:00~9:20 140分
10/16 晴	・散水ホースを撤去…………… ・草取り…………… ・剪定…………… ・掃き掃除…………… 男6人 女8人	■□ホースを洗う…………… ■□枝葉のあと片付け…………… ■□どんぐり拾い…………… 男子4人 女子3人	12. 植栽が込みすぎているのでかなり剪定して、明るくなった。 13. 子供たちはどんぐりのなる木をよく知っている。 7:00~9:15 135分
11/20 晴	・落ち葉掃き…………… ・剪定…………… ・泉掃除…………… ・すいとん作り…………… 男12人 女8人	■□小麦粉を買いに行く…………… □すいとん作りを見てHI氏と話を…………… 男子1人 女子2人	14. 落ち葉がかなり積っていた。 15. 日陰になる家があるのでコナラを大規模に剪定。 16. HI氏が朝食作りを始める。作業後、食べながら楽しいおしゃべり。 7:05~8:55 110分
12/18 晴	・剪定…………… ・落ち葉掃き…………… ・泉掃除…………… ・すいとん作り…………… 男13人 女13人	■□大人の周辺で…………… ●自転車遊び…………… 男子3人 女子1人	17. 朝食づくりはガスコンロと鍋を購入し、正式に行事部会が担当。 18. 剪定はナラやマキの枝おろし。冬は陽当りをよくするため。 7:00~9:00 120分
1/15 晴	・川掃除…………… ・泉掃除…………… ・剪定…………… ・施肥…………… ・せんざい作り…………… 男10人 女9人	■□ほとんど子供だけで…………… ▽どこに撒くべきかを…………… 男子3人 女子2人	19. 泉は井戸水のため藻が生える。 20. 年末に購入した生け垣用電動剪定機で効率がある。子供も注目する。 7:00~9:10 130分
2/19 晴	・芝生を焼く(写真NO.4)…………… ・泉の周りの土の入れ…………… ・背…………… ・施肥…………… ・泉掃除…………… ・芋がゆ作り…………… 男8人 女10人	4)…………… □遠慮きに芝生が燃えるのを見る…………… ▽土を掘る…………… ▽大人に先がけて…………… 男子4人 女子3人	21. 芝生を焼くのは土の中の種子を焼いたり、土を消毒したりするため。 22. 冬のせいもあるが土がたく、力仕事男性が中心になって土掘りをした。 23. 子供たちは父親たちのたくましい様子をみつける。 7:15~9:00 105分
3/19 晴	・草取り…………… ・泉の周りの客土…………… ・泉掃除…………… ・施肥…………… ・おじや作り…………… 男12人 女7人	■□大人の周辺で…………… ■□ちよつとやってみたい…………… □大人の周辺で…………… ■土山に登る…………… ■固い土を割る…………… ■大人とプロレス…………… ■水遊び…………… □話をしながら眺める…………… 男子5人 女子4人	24. 泉の周りの土をつるはしやくわで土を耕し、施肥をした。芝刈りは3/21 25. 「毎年このような事をするのだったら十年後は自信がない」との声。 26. 大変な作業と驚いていると、「前はもっとすごかった。立って休んでいる人なんていなかった」 7:20~9:10 110分
4/16 曇の雨	・草取り…………… ・剪定…………… 男8人 女8人	■□大人の周辺で…………… ▽枝葉を集める…………… 男子3人 女子4人	27. 雨が降ってきたので途中で中止。 28. 立入り禁止の芝生も青々としてきた。 29. ハナミズキなどの花が美しい。 7:10~8:15 65分
5/28 晴	・草取り…………… ・泉掃除…………… ・川掃除…………… ・剪定…………… ・芝草刈り…………… ・わらびもち作り…………… (写真NO.5) 男13人 女11人	▽大人の周辺で…………… ■大人と連携して…………… ■□かきまわすのを「やらせて。」…………… 男子5人 女子2人	30. 泉の周りの芝生がきれいになってきた。 31. TO氏は最後まで剪定をしていた。TO氏によって共用空間の植栽のバランスが調整される。 7:10~9:25 135分

【凡例】 ●幼児男 ○幼児女 ■小学生男 □小学生女 ▼中、高校生男 ▽中、高校生女 …………… 状況的つながり → 働きかけ

ティとしての一体感を高めている。

(4) 子供が直接触れられる環境と開かれた親子関係

子供の参加の意義としては、まず第1に、子供たちにとって手にとることのできる自然はまた手をかけて保ち、育てていく過程を持つものであることが認識されることである。特に樹木は管理に知識と技術を要するために学ぶべきこと(6/19, 7/17, 8/21 子供 剪定, 6/19, 芝草刈り), 楽しみを与える事が多い(6/19, 7/17, 8/21 子供剪定, 6/19 芝草刈り, 6/19, 9/18, 1/15, 3/19 泉の掃除, 5/28 川掃除, 写真 No.1)。第2には、

大人と子供が相互にかかわりあう場であることである(観察1, 写真 No.1)。あじろぎ横丁ではどの大人とどの子供が親子なのかかわからないほど親しい関係がある。親子を越えた大人との豊かなつながりは貴重である。また親子の間でも他者や環境とのかかわりの中で家庭とは違う様子に新たな発見もあるであろう。作業にかかわる子供は、異年齢の子供同士がよく助け合う。子供のインフォーマルな会話から大人は子供の世界の情報を聞き入れる。特に思春期の難しい年齢の子供が開放的に会話を楽しんでいるのも、五感を刺激される環境と人との開放

写真NO. 作業	写真	状況とその特徴
NO.1 泉掃除		中学生と高校生の女の子同士の会話がはずんでいる。掃除の手も動いているが、会話もとぎれる事がない。テストの事、友達の事、先生の事など年下の子が年上の子からアドバイスを受けていたりしている。近くにいる大人は、娘たちの会話をなげなく聞いている。他の子供は泉にじっと素足をひたして冷たい水の感触を楽しんでいる。掃除に参加する子供たちのほとんどがこの泉のまわりに集まる。泉のまわりの掃除の場は、異年齢間の子供の情報交換の場でもあり、緑と水と土の感触を五感で感じ取る場でもある。そばにいる大人は、作業をしながら娘たちのインフォーマルな会話から学校生活についての情報を聞き入れている。大人にとってむずかしい年齢の子供が、このオープンな作業の場では心を解きはなつて会話を楽しんでいる。
NO.2 草取り (大人)		草取りの作業の間、大人の間でもさまざまな会話が聞かれる。特に男性同士の井戸端会議が目につく。会社の事、子供の事、生活情報、地域の問題、作業そのものについての提案など、職場の人間関係を離れた気安さと新鮮さを感じられる。環境を整えるという義務的な作業もこのような会話によってなごやかなものとなっている。また身近な環境に触れることで、職場に偏った生活のバランスを取戻すきっかけともなる。協力し合ったり、体を使ったりする作業による達成感もある。
NO.3 草取り (子供)		大人の周辺では、就学前の子供も自発的に自分のできる範囲で仕事をみつけて作業を行なう。自然環境を多く取入れた共用空間ゆえに、興味を引く作業もある。手にあまる作業の時には子供同士が助け合う。作業に加わらずになんとかウロウロして、大人の様子を見ている子供もいる。乳母車の赤ちゃんはそばに親がいないくても、近くにいる大人や子供が気遣っている。大人はどの子供も自分の子供の様に扱い、子供も親以外の大人に関心を示す。子供の存在は、作業に活気を与えている。
NO.4 芝生を 焼く		土の入れ替えに際し、土の中の種子をバーナーで焼いている。専門的道具の使用を遠巻きに子供たちが見守る。水、土、緑に加え、火もまた大人を強く引きつける要素を備えている。土の入れ替えには男性が協力して力仕事を引受けた。大人に対して対等に口をきく子供たちもこの時は大人たちの力仕事を真剣にみつめ、尊敬のまなざしであった。体力のいる作業を維持していく不安が語られた。
NO.5 わらびもち 作り		参加者を増やすために始まった朝食づくりであるが、これも子供の興味を引きつける。わらびもちをかきまぜながら、大人と子供たちがさりげなく普段の生活の様子について話をしている。面と向って話すよりも、作業をしながらかわる会話に本音がもれることもある。作業後の会食はややかで、作業中にでた問題について具体的な解決策が話し合われることもある。戸外で食を共にするという楽しさがあふれている。

図-5 作業の状況とその特徴

的な関係性によるものではないだろうか。また環境生成の過程は、子供に無償で働く親の姿を見せるという人的環境生成の過程でもある点は重要である。大人と子供が見る見られるという関係の中で大人は子供に対する、子供は大人に対する人間的な視野を広げられる。

6. まとめ

以上のことから、9年間の環境生成過程は決して予定調和ではなく、たえず模索しつつ停滞をこえて再創造に向うマデリングスルーの過程であり、加えて環境をコントロールしていく力の行使は、住み手それぞれのもつ価値観の高め合いと主体的協力といった力強いコミュニティづくりの裏付けによってなされたものであることがわかった。特に共同作業を通して人が出会うといった物的環境生成から派生した人的環境生成は、今日のプライバシー重視の都市集住に多様なメッセージを投げかけている。あじろぎ横丁のような生活は協同性の縛りがきついのではないかと懸念もあるが、日常的には個々の生活を重視し、生活時間の違いから全く顔を合わせない人も多い。共働きの多く、本来ならばコミュニティに出にくい層が、月に1度という機会に顔を合わせ、協同性の負担を楽しみに転化させている点が意義深い。自主管理についても資金の節約のために自分たちでせざるを得ないという必然性があつたにせよ、お金では買えない多くの価値が創出された。また「子供のための環境」も、親の一方的な自己犠牲の上にあるものではなく、親にとっても環境や人から学び、楽しむ要素をふんだんに備えた環境づくりであった。

考察全体をふまえて、そのコミュニティづくりとしての持続性を高めた関係要因、および、集住価値を生成させた関係概念を抽出してみると次のようになる。第1に、その協同性が月に1度という時間的な「定期性」を持っていたこと。第2に物的環境としての「有機性」が、その維持のために住み手の力と知恵を結集させるといった、常に人を引きつける要素を備えていたこと。第3に、人的環境としての「開放性」が、内部では家族としての枠組みを取払い、大きな家族としての親密性を保ち続けたこと。また地域に対しても開かれた関係にあつたこと。第4に、物的、人的環境維持のために、創意工夫をこらし、改修という変化をもたらすことによって空間と人の両方にわたって親密性を更新させたが、その住み手個々の創造力発揮という「自律性」。第5に、そこでの住み手の行為が物的環境生成のための作業や学習の意味だけでなく、環境から得られる心理的影響や人的相互関係から派生する価値の生成といった意味の「複合性」をもっていたことがあげられる。これらの諸要因は相互に絡み合っているが、それらの生き生きとした相互関係は住み手の意識の中での強制と自律、義務と自主、能動と受動、

苦役と楽遊、日常と非日常、ルールと逸脱といった両義的状況の精妙なバランス意識によって維持されている。居住者参加型計画、管理イコール良好なコミュニティではなく、意識の浮沈の中で住み手が自ら価値を選びとる過程を経て変容しつつ形成され、その「良好さ」の尺度はそれぞれのコミュニティにとって固有のものであると考えられる。

ともすれば従来は、共に住み合いながら地域に対してまとまった力となりにくい匿名的な集合住宅群が多く供給されてきたきらいがある。しかし顔の見える居住者の主体的視点を結び合わせていく仕掛けは、余暇の増大に伴い経済活動とは異なった観点からの地域づくりに目が向けられる時代の到来の中で、今後深い意味を持つものとなろう。そして、義務と自主のバランスのもとにだれもが参加できる環境づくりは、コトの共有を通して社会、生活、趣味などの関心の領域を身近な人と共に広げ、実行に向わせる場としての可能性を合わせ持っている。今後は、住み手がモノだけではなく、コトの共有によって人間と空間の関係性の豊かさをもたらす集住価値を高めて行く過程を、一般の集合住宅団地とその住み手の中にどのように生起させていくかについて考察を重ねたい。

本研究は平成2・3年度科学研究費補助金（一般研究B）の研究助成を受けた。

参考文献・注

- 1) 日本建築学会：集合住宅研究史，p.124，1989
- 2) 福田由美子，延藤安弘，横山俊祐，今井邦人：環境学習の場としての共用空間に関する研究—コーポラティブ住宅・ユーコートの緑環境における考察—，第25回日本都市計画学会学術研究論文集，pp.547～552，1990
- 3) ミッシェル・セールは西欧の知の整然たる価値体系は、一元的な価値という絶対的な価値の上にあるが、新しい知の「生成」は、一元的な価値のもとで切捨てられてきた価値を見直し、一元性と多元性のあいだのゆらぎによって創造されるとしている（ミッシェル・セール著 及川 頤訳「生成—概念をこえる試み—」1983，法政大学出版局）。本論では価値の創造の多元性という意味合いで「生成」という言葉を用いている。管理行動そのものが内包する価値作りのプロセスをさす。
- 4) 延藤安弘ほか：コーポラティブ住宅の計画研究としての方法的位置付け—ユーコートの特質とその計画原理（1）—日本建築学会計画系論文報告集，第369号，p.15，1989
- 5) 関西のコーポラティブ住宅で月1回共同で管理作業を行っている7例との比較においてあじろぎ横丁の男性の参加率は62.0%，子供の参加率は20.8%と最高であった。山田朋来：コーポラティブ住宅の自主管理に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp.745～748，1991
- 6) 5)で対象とした住宅のうち6例についての管理参加への意識調査では子供の管理参加に対してあじろぎ横丁の男性は全員が肯定的な答えであった。山田朋来：コーポラ

ティブ住宅の共用空間における自主管理に関する研究,
日本建築学会近畿支部報告集, pp. 785~788, 1990

- 7) 住宅都市整備公団：グループ分譲 10 年の足跡, 同公団,
p. 30, 1991
- 8) あじろぎ横丁とユーコートの比較

	あじろぎ横丁	ユーコート
戸数	17戸	48戸
居住歴	9年	2)の文献で扱った時点では3年9か月
就労率	100.0 % (1989)	85.3 % (1990)
共同作業形態	全員	2班が毎月交代
参加率・全体 ⁵⁾ 子供 ⁵⁾	52.3 % 20.8 %	24.1 % 12.6 %
共同作業時間 (月平均 ⁵⁾)	122分	86分
作業の種類 (年間延べ ⁵⁾)	62種類(四季折々作業の種類が多い)	36種類(冬季は2~3種類になる)
改修歴	'92年6月	なし

また、ユーコート内部でのサークル活動が盛んで(13サークル)、人同士のつながりという観点では共同作業よりはサークル活動の方が重要な位置を占めている。

- 9) 延藤安弘：生命のはりのある集住体一字治・あじろぎ横丁にみる一, 都市計画 140 号, pp. 28~34, 1986
- 10) 安藤延男編：コミュニティ心理学への道, 新曜社, p. 59, 1979
- 11) 5), 6) の調査および加藤 寛, 松崎昌子：コーポラティ

ブ住宅における子供の遊び環境について—あじろぎ横丁における一考察, 京都府立大学卒業論文, 論文資料 14, 1991

- 12) 境界のない専用庭の管理は共用作業の対象にはならないので多くを記さなかったが、2戸1という住戸形式上、隣戸との関係をオープンにする効果がある。隣同士で管理作業を行ったり、池をつくったり、またぬれ縁は住人同士の接待の場になったりしている。
- 13) フランスの哲学者ガタリは、従来のエコロジー運動がいわゆる“環境問題”(自然環境を中心とした)に限定されてきたことに異を唱え、現代世界の全面的危機に対処するためには、環境のエコロジーに加うるに社会のエコロジー(社会的諸関係)と精神のエコロジーの三位一体的理論展開を提唱している。ここで見られる個々の人間の意識の変化は、ガタリのいう「個と集団の本源的自立化作用」「人間の存在の仕方への再創造」という意味での社会的エコロジーに近いものがある。フェリックス・ガタリ 杉村昌昭訳：三つのエコロジー, 大村書店, pp. 113~114, 1991
- 14) 6) よりあじろぎ横丁は48.5 % と最高であった。
- 15) 調査した年の参加率はその前後の年より参加率は高い。作業への調査としての参加が刺激となり参加率を上げたという見方ができる。

(1992年4月10日原稿受理, 1992年10月16日採用決定)